

世帯数 200戸 人口 1,267人
総戸数の約半数 101戸が養蚕を営んでいました

*** 昔の地図でたどる金田地区（入野、長持、長瀬地区 1）***

大正10（1921）年 大日本帝国陸地測量部 世帯数 204戸 人口1,399人



入野村（以能牟良）

戸数 56戸

金目川 村西ヲ流ル（幅二十五間）昔ハ村ノ中程ヲ斜ニ疏通シ 巽方ニテ 鈴川ニ合セシガ 屢水溢セシヲ以テ 宝永三年 命アリテ 今ノ如ク堀替レリ 元ノ川筋ハ 古川ト唱テ 小流今ニ存ス（金目川ニ続ケル所幅三尺許 此所ニ堰アリ 夫ヨリ中程ニ到レバ 幅二間許ニ及ブ 此川堀替ノ時 川鋪トナリテ 村高五十七石余減ズ）

金目川左右ニ堤アリ（高一丈二尺） 丸木橋一ヲ架ス（長十間竹橋ト唱フ） 堰四ヶ所（本堰、中堰、飯島堰等ノ名アリ）設ケ 水田ノ用水ニ洒ギ 末ハ各鈴川ニ落 又広川 長持両村ヨリモ用水ヲ引リ

鈴川 村ノ東堺ヲ流ル（幅八間） 堤アリ（高一丈二尺） 橋ニヲ架ス（共ニ長八間 一ハイロウシ橋 一ハ平等寺橋ト唱フ） <新編相模風土記稿>

① 金田公民館

- 昭和24（1949）年4月 小学校の2階特別教室を改装し、公民館創設
畳数40畳、座机、黒板、テーブル等の備品、図書館・図書
昭和30年1月 テレビ設置
- 昭和28（1953）年7月 健民館落成（小学校校地内）
約81.8坪、ステージ、映写設備、柔道畳、剣道具、柔道着、
排球・庭球・バドミントン用具一式等 <平塚市史8>
- 昭和37（1962）年4月 市内4番目公民館として開館（現・駐車場）
平塚市公会堂を解体した資材を活用し建設
- 昭和61（1986）年3月 現在地に移設完成。体育館付属の公民館としては市内初

② 少林寺

『片岡山ト号ス。臨濟宗。（武州多摩郡山田村廣園寺末）応永三十一年ノ草創ナリト云。・・・本尊正観音。・・・寺領十石六斗ノ御朱印ヲ賜フ・・・』 <新編相模風土記稿>

③ 金田小学校

- 明治10（1877）年以前 「寺田縄学校」・蓮昭寺境内に開校
通学範囲 飯島村、寺田縄村、入野村、
長持村は広川・善福寺・恩古館（行政区により）
- 明治11年1月 「入野学校」・少林寺境内に長持地区を含め開校
児童数 約50人（含む・長持児童） 先生2人 建築資金 村民拠出
- 明治22（1889）年4月 町村制施行 金田村誕生（5か村、含む・入部村）
「尋常金田小学校」開校
- 大正5（1916）年6月 少林寺西側 新校舎完成
大人：勤労奉仕で水田埋め立て、禁酒・禁煙令により貯金
児童：溝植え・遠足費用捻出 <金田小百周年誌『かねだ』>
- 大正12（1923）年9月 関東地震・校舎倒壊
- 昭和20（1945）年7月16日 太平洋戦争・平塚大空襲・校舎焼失
金田地区内の寺社で授業（分散授業）
新校舎建設に地元民が活躍、校舎設計図は村長さん、校庭は製材所となった。
- 昭和22（1947）年4月 中郡金田村立金田小学校
- 昭和31（1956）年9月30日 金田村、平塚市に合併
- 昭和31（1956）年9月 平塚市立金田小学校
- 昭和39（1964）年10月1日 東海道新幹線 営業開始
- 昭和44（1969）年5月10日 現在地に新校舎落成

④ 避病院

- 明治9年（1876） アメリカ海軍からコレラが爆発的に流行し、明治政府はコレラ（虎列刺病）として予防策をとり、患者を隔離するため1878年ごろから日本各地に避病院が設けられました。以後、はやり病、伝染病患者を隔離する施設とされました。

- 建物は、昭和19年 改装され、集団疎開で来村した川崎市日吉小学校の宿舎となりました。
- 疎開児たちは昭和20年5月、津久井郡牧野村へ移転後、避病院は取り壊されました。

⑤ 古川排水路・久保田控堤（控え土手）

- 古川排水路： 金目川の旧河道（古い流れ）といわれています。
- 久保田控堤・控え土手 （入野村字久保田）
『この付近は入野村の中でも周囲より低く窪んだ湿地で水湛場（スイタンバ・水がたまる所）かつての金目川の古い流れとされ、寺田縄の中でも最も低い所とされていた。
金目川の流路が、寺田縄村と入野村の村境となっていた』 <わが住む里の江戸時代>
- 『控堤居村際ニ有之低地ニ而、満水之節者水甚、種穀夫食迄水冠至而難涉仕候』
- 字久保田水控堤の規模
長 貳百三拾五間 （423m）、 敷 三間 （5.4m）、
馬踏 六尺 （1.8m）、 高 五尺 （1.5m） <入野村明細帳>

⑥ 馬頭観音 観音像は人の悩みを救済する仏像。馬頭観音は人々の煩悩を食べつくすといわれます。信仰はインド、中国、日本に伝わり、馬を供養するために建立されました。

⑦ 水車

- 入野成願寺脇から鈴川へ流れる金目川の古い流れ、古川に水車が設けられていました。
- <入野> 「入置申一札之事」 安政2（1855）年8月 御役人中
与左衛門の水車稼ぎ年季替えの七か条の定書。
水車は水を利用するため村の許可を必要とし、水車稼ぎには水車運上という年貢が課せられていました。また、第三条には、水神講のとき酒代などとして、金拾両を村へ寄付するとあります。（水車稼ぎにはそれに見合う収益があったと思われます。）
- 文政九（1826）年10月、高座郡栗原村（座間市）では、水車の騒音について争いが起きています。この頃、すでに騒音問題が発生していました。 <平塚市史3>

⑧ 福田寺

- 『長久山ト号ス。曹洞宗（寺田縄村吉祥院末）開山融山長祝。本尊華嚴釈迦』
- 所蔵品：平塚市重要文化財 紙本墨画淡彩 十六羅漢像、 紙本着色 十王図 の2点

⑨ 八坂神社

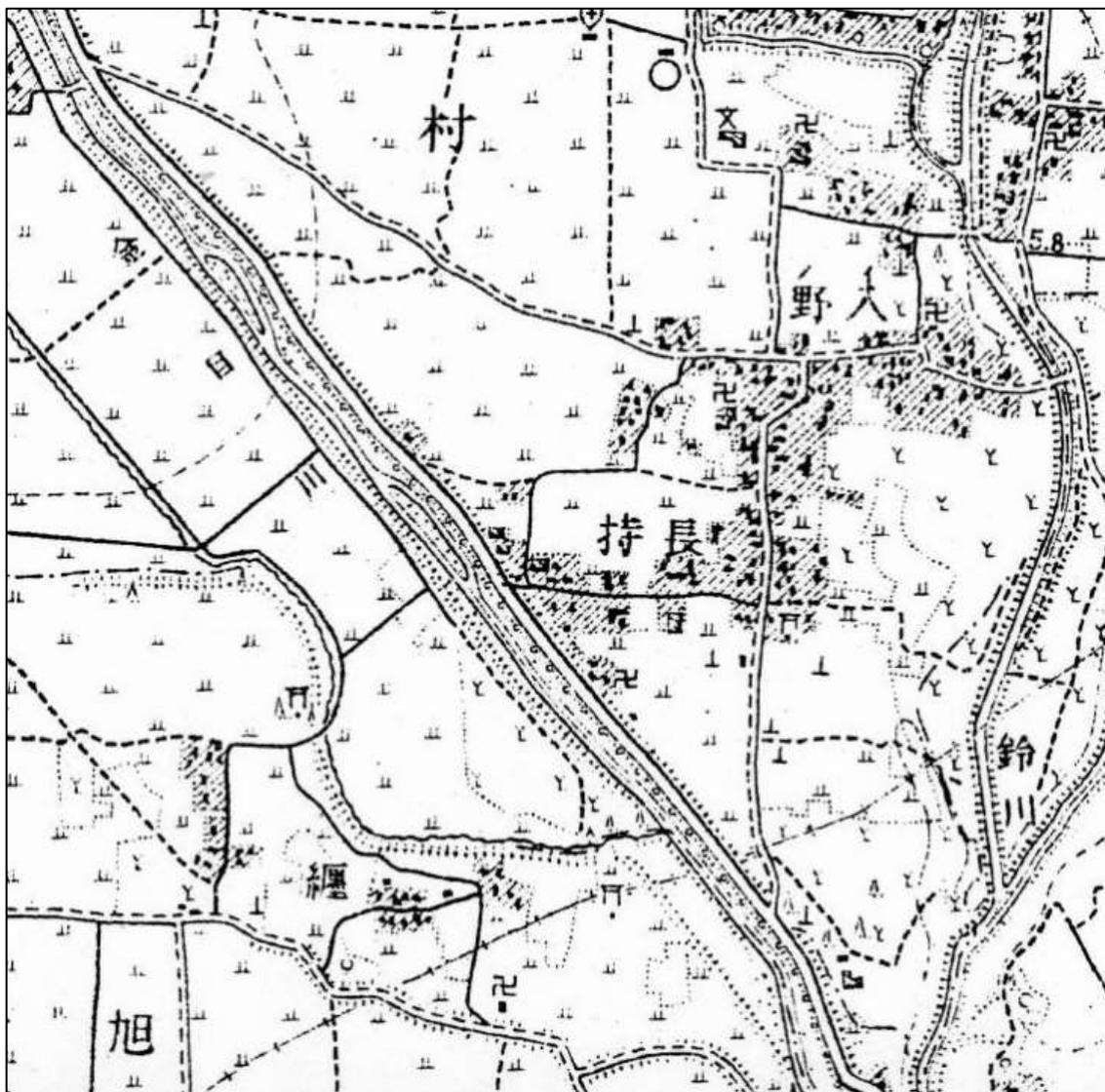
- 八坂神社は、旧名、牛頭天王社（ごずてんのう社）と呼ばれていましたが、明治時代に神仏分離の政策により、八坂神社と改名されました。
- 牛頭天王社
『村ノ鎮守ナリ。本地仏、釈迦、多宝、宝性、薬師、弥陀ノ五軀ヲ安置スト伝フレド、今銅像二軀。及仏像ヲ鑄出セン銅鏡一面ヲ安ス』 <新編相模国風土記稿>
- 牛頭天王は、祇園精舎の守り神であるとともに、河川の神、疫病の神でもあって。疫病の多くは夏に流行し、洪水によって蔓延するので、河川との係わりが深く、被害が多発する所に祀られています。 <市博物館浜野学芸員講演より>

⑩ 八坂神社の道祖神5基

- 道路拡張工事に伴い、昭和45年頃すべて八坂神社境内に集められました。
- 仲町の道祖神 入野167番地の南辻、道のだ真ん中に立っていたケヤキのもとに鎮座していました。かつて、金目川が流れており、このケヤキに船を繋いでいたといわれています。
- 入野ではセイトバライの時、年長の子をフルデンカ、その下をテンカシタと呼び、高等小学校2年生はフルデンカと云って、賽銭の分け前を一番多くとりました。子どもたちは、賽銭を集めてまわる時に「疱瘡も軽く、はしかも軽く、悪魔祓い」などと云って祓って歩きました。

<平塚の道祖神>

*** 昔の地図でたどる金田地区 (入野、長持、長瀬地区 2) ***



① 天王道

- 牛頭天王の天王に因んで対岸の入野飯島に至る道を「天王道」と呼んでいます。
- 八坂神社のまつりには、神輿がこの天王道を通して水神・水神松の所まで渡御していました。

- この道が、金目川が改修される直前の金目川と考えられ、流れは八坂神社付近を経て、「下之宮橋」付近で鈴川に合流していたと考えられています。

② 水神之塔

- 水神橋のもと、「水神松」とともに祀られています。村人たちは農業用水が枯れぬよう、堤防が決壊しないように祠を立て、祈りを捧げました。
- 現在は、入野八坂神社の神輿の渡御はしませんが、祭礼日に宮司、宮総代、農業委員さんたちが「水神の祠」前で、祝詞を挙げています。

長持村（奈賀毛知牟良）

戸 数 26戸

金目川 中程ヲ流ル（幅二十間）古ハ北方入野村ヲ流レシガ 水理不弁ナルヲ以 宝永三年 命アリテ
川筋堀替 村内ヲ経ル事トナレリ

鈴 川 東ヲ流ル（幅八間）

<新編相模国風土記稿>

③ 金目川旧河道を考える （●1～5）

金目川は数万年前まで、秦野市蓑毛から南、葛川に流れ、相模湾に流入していました。しかし3万年前頃から現在の河原町辺りから東へ流路を変え、南金目を通して平塚市域へ流れるようになりました。

この時、東へ流れを変えたのは、秦野盆地の南、大磯丘陵との境をなしている「渋沢断層」が5万年前以降に活動を始めました。それにより大磯丘陵を隆起させ、秦野盆地を沈降させました。そのため南の方向に流れていた金目川は、「渋沢断層」によって行く手を阻まれ、東へと流れの方向を変えました。

●1、 小田原厚木道路をまたぐ岡崎陸橋（平塚市岡崎）

ウルム氷期（7～1万年前）の金目川は、南金目から北東へ流れ、岡崎から南東に流路を変え、寺田縄・新町を経て東八幡付近で相模川に合流し、急勾配な河床を形成していました。

岡崎陸橋を建設する工事では、地下30～40mの地から金目川の河床礫が見つっています。

・・・ 氷期、金目川はこの地を流っていたのでしょうか ・・・

●2、 平塚西郵便局の地

時代は大きく下り、金目川と大根川にはさまれた沖積平野に作られた自然堤防の標高約18mの地に、古墳時代の遺跡、沢狭遺跡（さわざまいせき）があります。場所は、平塚西郵便局の建設に伴い発見されました。18mの高さですから、金目川からの土砂堆積が進み、地下30～40mの地を埋め尽くしこの地形が作られました。

「この遺跡は、旧金目川の自然堤防上に展開された、古墳時代を中心とする県内でも数少ない大型の祭祀遺跡です。その主な時期は、5世紀後半で、祭祀の対象は『河川』と考えられます」

<平塚の遺跡>

祭祀遺跡であれば、金目川の河岸で祭祀が執り行われたと推測されます。氾濫を避け、農業生産の

安定的な維持を願い、河川への畏敬の念を祈りとして奉げたのでしょうか。

・・・ 古墳時代、金目川はこの地を流れていたのでしょうか ・・・

●3、 古川排水路

現在、農業用水の排水路として古川排水路があります。鈴川の河川改修に伴い護岸が施された流路が作られました。明治時代の地図には「水車」が設けられていますし、その当時の古川は、今日のように深く掘り下げられてはいなかったと思われます。

寺田縄219番地、古川排水路に沿って「水神」が祀られています。水害に悩まされていたからと伝えられ、水神講も組織されていました。

金目川は、宝永3（1706）年、筋替えで現在のような流れになりましたが、この流れと比較して古い川、古川と呼ばれるとの言い伝えもあります。

『宝永三年 命アリテ 今ノ如ク堀替レリ 元ノ川筋ハ 古川ト唱テ 小流今ニ存ス』

・・・ 新たに筋替えられる前、金目川はこの地を流れていたのでしょうか ・・・

●4、 成願寺の北に流れる排水路

成願寺付近に排水路があり、現在は小さな流れとなっていますが、改修直前の金目川の流れの一部といわれています。新編相模国風土記稿には『金目川 村（入野村）西ヲ流ル（幅二十五間）。昔ハ村（入野村）ノ中程ヲ斜ニ疏通シ、巽方ニテ鈴川ニ合セシガ ・・・』と記されています。

入野村仲町の道祖神は、入野167番地の南辻、道のど真ん中に立っていたケヤキのたもとに鎮座していました。かつて、金目川の旧河道が流れており、このケヤキに船を繋いでいたといわれています。金目川は東方向に流れ、入野牛頭天王社付近を通り、下之宮橋付近で鈴川に合流していたと考えられています。

河川改修前の金目川の本流を考えると、この地の「字名」から金目川の流れを推測することができます。金目川は、通称オオマガリから下流にかけて「崩れ」、「上・下砂原」、「向田」、「向町」、「蛭田」、「根下」、「古屋敷」となっています。（p8 字名参照）

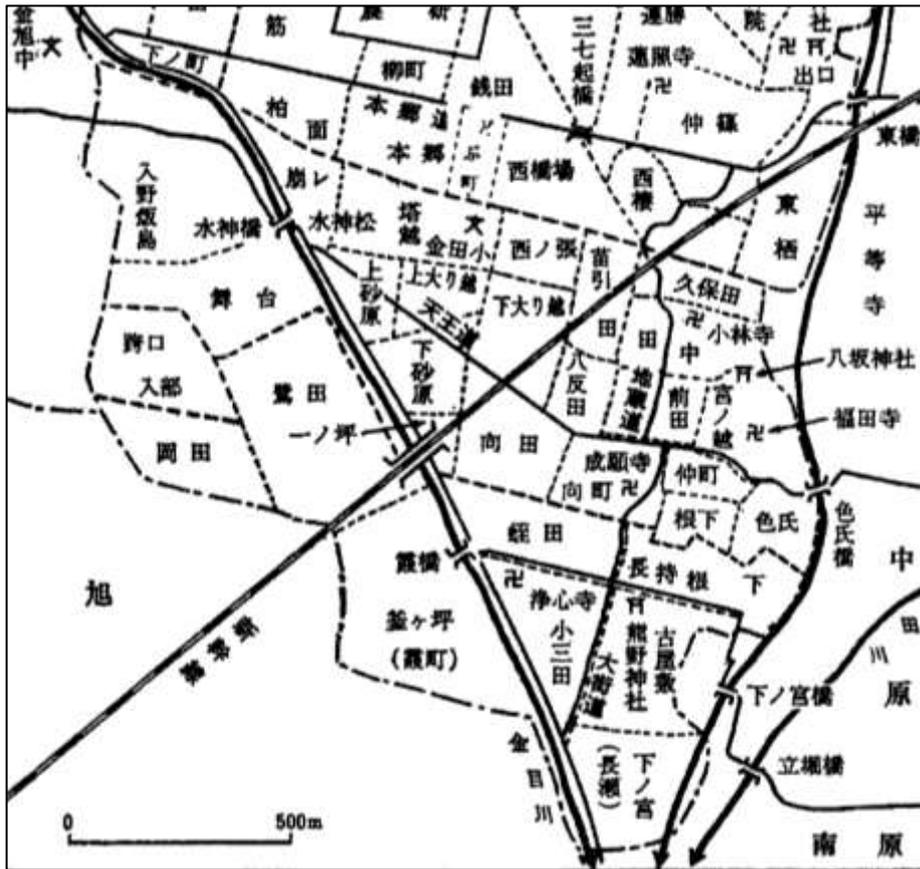
今日残されている字名は、いずれも災害を意味する地形といわれ、牛頭天王社からは「天王道」が通り、金目川のたもとには「水神」が祀られています。「水神」を祀った天王道がかつての金目川の流れと考えられています。

地図に目をやると、鈴川の右岸、下の宮橋付近に桑畑が広く分布しています。また、付近の字名は「古屋敷」です。桑畑の立地条件は「砂地で日当たりが良い」所とされています。

付近は、かつての金目川が鈴川と合流していた地点であり、金目川の流れに運搬された砂礫が堆積した所と思われます。この付近の字名は「古屋敷」です。『昔、長持の村はここにありましたが、鈴川が氾濫するので約300年前に土地の高い西方に移転したと伝えられています』 『長持村の鎮守 熊野神社、浄信寺も現在地に移りました』 『入野村は宝永噴火の翌年、鈴川近くの「根下」から数軒の家が西町へ引っ越してきたと伝えてあります』 <民俗調査報告書>

・・・ 河川改修の直前、金目川はこの地を流れていたのでしょうか ・・・

④ 字 名 (天王道と金目川の旧河道)



<平塚の地誌>

●5、 現在の金目川の流れ

『金目川は、河床が高く、源流からの距離が短く比較的急流のため、川が曲がった箇所では洪水が発生しやすく、近世には記録に残るだけでも10年に一度の割合で水害が起きました』<金目川の博物誌>

洪水の頻度が高く「暴れ川」といわれましたが、コメの生産には欠くことのできない農業用水として盛んに利用され、「母なる川」とも異名をとっていました。

金目川の氾濫・決壊により住居は浸水し、家財・農具は流され、田畑には岩や砂礫が積もり、作物は腐り、田畑は荒廃を極めました。

元禄16(1703)年 南関東を中心に大地震が発生し家屋の倒壊、田畑の荒廃をもたらした。その被害の規模から「元禄型の関東地震」と呼ばれています。この地震の影響で金目川の河床が高くなり、その翌年とよく翌年の2年続きで大雨が降り、堤防が決壊し地域に大きな被害をもたらしました。

住民による窮状の訴えが幕府に出され、幕府による現状把握(見分)がなされ、『昔ハ村ノ中程ヲ斜ニ疏通シ 異方ニテ 鈴川ニ合セシガ 屢水溢セシヲ以テ 宝永三年 命アリテ 今ノ如ク堀替レリ』(前出)

宝永3(1706)年2月 幕府の手により、金目川の筋替え(流路を変更する)と川幅の拡幅が実施され、今日のような流れになりました。

地図を見てわかりますように、飯島から長持地域の間が直線で結ばれています。金目川の自然の流れではありません。田畑を人工的に掘削し水を流した様子がわかります。その間約1.5kmになります。

筋替えの翌年の宝永4（1707）年には、富士山が噴火し火山灰の降灰、砂降りと呼ばれています。平塚市域では約20cmも降り積もり、金目川の流れや農地に多大な被害をもたらした。

・・・ 幕府の手により、今日のような流れになりました ・・・

（参考） 桑畑 土壌：深さ60cm以上の砂地。日当たりが良いなどの条件

◎ 元治元（1864）年入野村領主より『桑植え付け禁止』の申し渡しが出されました。

「近年、田・畑に桑を植え付けるものが多いのは、もってのほかで、五穀を栽培せず蚕を飼ってはならない。今後、新たに田・畑に桑を植えることを禁ずる」<意訳> とあるように、江戸期末の金田地区では、米、野菜生産に加えて養蚕が盛んに行われていたことが分かります。

◎ 明治44（1911）年「金田村誌」「・・・養蚕業盛んにおこなわれ・・・」

◎ 昭和10（1935）年「神奈川県桑園の緑肥作物又は食用作物への転作を強く求めた」

<神奈川県史>

◎ 昭和11（1936）年「金田村農家戸数165戸のうち養蚕農家101戸」

<経済厚生基本調査>

◎ 戦争の時代を迎え、食糧増産の掛け声は養蚕業の衰退を早めました。

平塚に養蚕業が急速に広まったのは、明治20（1887）年民権家として知られる金目地域の宮田寅治が、長野県小県郡から養蚕業の先駆者倉津金次郎を招いて金目を中心に奨励したことによる。以来、有利な副業として栄えた」

<平塚郷土史辞典>

⑤ 天井川

「河床が周囲の平地より高くなった川」

金目川の高度・・・水神橋付近：12m、 新幹線鉄橋付近：9m、 新霞橋付近：9m、
しまむらへの信号機付近：6.6m、 小川歯科医院付近：6m

<国土地理院地図電子国土Web>

⑥ 浄信寺

号は長持山古学院、浄土宗、増上寺（東京都港区）の末寺。開山相誉学源（天文6（1537）年卒）。開基城田若狭（大永2年卒）『寺地、古くは現在地より東南の方2町ほど隔てたところにあったが、元禄8年（1695）に現在地に移した』。『此村水場寺地水ノ中ニ有り、依之現主亥年田場ヲツフシ寺建也』

<平塚市史13>

⑦ 熊野神社

『大住郡吉沢村高麗に鎮座していた熊野大権現』を勧請しました。明治になり熊野大権現社から熊野神社と改名されました。祭神は伊弉諾命（いざなぎのみこと）、伊弉冉命（いざなみのみこと）、熊野速玉命（くまのはやたまのみこと）

<神奈川県神社誌>

⑧ オオケードー

秦野街道・曾屋道から入り、金田地区の中心部を貫く街道の通称として呼ばれていました。

大山参りが盛んになるころは、この道を経て岡崎地域の簀の子橋を通る道。また寺田縄の東橋を渡り平塚からの道と合わさり、大山へ続く道を「大山道・大山街道」と呼ばれました。

⑨ 地藏道

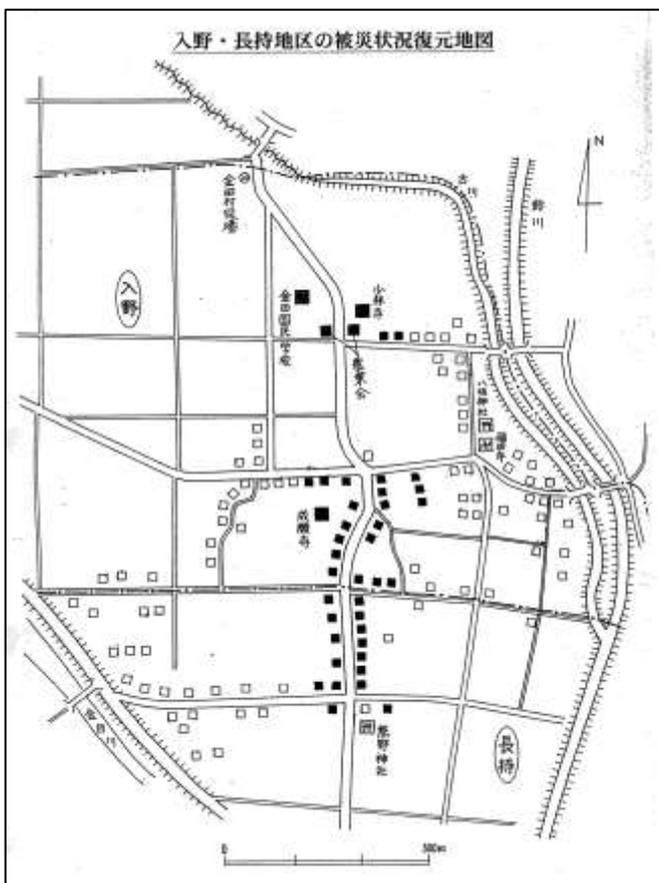
かつての金田の「ミニゴルフ場」付近の道すがら、お地藏様が祀られ、付近の道を、「地藏道」と呼んでいました。

⑩ 成願寺

山号は光明山安楽院。宗派は天台宗。莊厳寺（高根）の末寺。開山慶賢（元和 8 年（1622）卒）明治時代から融通念仏（ゆうずうねんぶつ）の布教拠点とされ、大住郡のみでなく足柄上下に亘る広い地域で多くの信者を集めていました。
＜相模国風土記稿・平塚市史13＞

⑪ 平塚空襲による金田地区の焼失家屋

（市民がさぐる平塚空襲 資料編）



■ 印の個所が焼夷弾により焼失した家屋。金田村役場、金田国民学校、農業会、少林寺、成願寺、そして金田地区の中心道路（オーケードー）に沿った家屋が焼失しました。

この爆撃で、亡くなられた方は、10歳未満のお子さんを含め6名。

農村地帯の金田村（入野）が焼夷弾の爆撃を受けた理由は不明ですが。

平塚の市街地以外の南原、中原、出縄、山下、八幡、真土、横内地域も同様に爆撃を受けました。

平塚大空襲

昭和20年7月16日 午後11時32分～17日午前1時12分間、市街地を中心とした空襲
B29爆撃機132機 投下焼夷弾数 447, 716本 （平塚市人口54,050人）